様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０７２８

研究課題名（和文）中国雲南省の少数民族における文化変容に関する社会学的研究

研究課題名（英文）A Sociological Study on Cultural Transformation in the Ethnic Minorities in Yunnan Province, China

研究代表者
林　梅（LIN, Mei）

関西学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：２０６２６４８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国辺境地域が、市場経済や国家による開発に組み込まれる過程で、均一的な文化の受容を通して地域社会を変容させながらも、少数民族独自の伝統や文化を継承していく様態を明らかにすることに努めてきた。それは、グローバリゼーション時代において直面せざる得なくなった多文化社会のあるべき方向性を模索する作業で、そこには多重の人為的な「境界」による他者性を生きながらも、そうした「境界」を使い分けている構造があったといえる。

研究成果の概要（英文）：In this research, we have tried to reveal how the remote border areas in China continue to inherit the unique traditions and culture of ethnic minorities, while transforming their communities through the acceptance of homogeneous culture in the process of either being incorporated into the market economy or the development projects by the state, among others. It can be said that this was an effort of seeking toward an unavoidable multicultural society in the era of globalization, amidst the existence of otherness due to multiple artificial “boundaries,” and that there was a structure using that “boundaries” differently.

研究分野：社会学、民俗学、文化人類学的アプローチから日中韓の地域・民族を研究

キーワード：多元的世界　辺境地域　包摂　排除　近代国家

１．研究開始当初の背景

中国社会の経済発展は、都市部だけでなく、国家権力が長い間実質的に及ぶことのなかった内陸部の辺境地域にまで及んでいる。こうした地域は歴史的に、複数の少数民族がそれぞれの伝統や文化を継承しながら、共存してきた。

中国の雲南省の場合、明の時代から中国王朝の版図に組み込まれてはいた。だが、実際には、古典中国の統治形態は各地域の自立性を前提にしており、雲南省の場合も例外ではなかった。それは、20 世紀初頭に雲南省を調査した鳥居龍蔵の記録にも明らかであり、実際には、地域の土司が、実質的、政治的、経済的に支配していた。土司の多くは、漢族化した「少数民族」であると言われているが、一方で漢族以外の「民族」は、文化的な同一性を保ちながら、相対的に自立した生活を営んでいた。しかし、中華民国の統治下で自由を享受していた土司たちは、第二次世界大戦後の国民党と共産党による内戦で国民党軍に協力し、共産党によって、その支配に終止符が打たれた。中華人民共和国の誕生は、この地域における初めての本格的な近代国家の成立を意味する。そして、1990 年代からは、こうした地域にも市場経済が浸透するようになり、国家による開発が進められている。しかし、人文・社会科学において、地域の自立性がもつ社会的意味について根本から問う研究は乏しい。

２．研究の目的

研究目的は、中国辺境地域が、市場経済や国家による開発に組み込まれる過程で、画一的な文化の受容を通して地域社会を変容させながらも、少数民族独自の伝統や文化をどのように継承しているのかを明らかにすることである。また、そこから、文化的多様性や多民族共生のあるべき方向を明確にするための知見を提供する試みである。

３．研究の方法

本研究では、中国雲南省新平イ族タイ族自治県に焦点を当て、国家権力とは無縁だった少数民族を国家制度のなかに組み込む様態に着目した。特に、国家が一方的に少数民族を包摂するのではなく、少数民族も相対的な自立性を確保するための戦略を駆使している点を重要な論点として捉えている。

何より中国における中央と地方の関係は単純な上下関係ではなく、さまざまな利益分配の関係、つまり国家、集団と個人の利益が密接に関連している。そうしたなかで、辺境においては、国家は自明のものではなく、社会を律するうえで、最も重要な単位は別にあると想定できる。国家を前提としながらも、国家を超えたさまざまな位相における交流と移動が頻繁になった今日、元来、外部からの影響を最小限にとどめることで成り立ってきた社会が、どのような変化を遂げるのかは、世界的視点から見ても重要である。また、もし、こうした社会にまで、グローバリゼーションの波が押し寄せてきているとしたら、そこに、近代国家成立以前はもちろんのこと、近代国家成立直後とも異なる新たな社会の姿が現れていることを見て取れる可能性があり、まさに社会学の研究対象として構成される意義があるのである。

そこで、本格的な近代国家の形成を意味する中華人民共和国成立以降、国家権力とは無縁だった人々と地域を国家制度のなかに組み込んでいく動きに注目した。先ず、「民族識別工作」による民族名称の確定過程を近代化政策の一環として捉える。次いでは、改革開放以後のグローバル化のなかで、成長の基盤としての近代国家制度を整備と、経済的に急速に成長していることとの密接な関係性を問い直す。

４．研究成果

本研究では、中国辺境地域が、市場経済や国家による開発に組み込まれる過程で、均一的な文化の受容を通して地域社会を変容させながらも、少数民族独自の伝統や文化を継承していく様態を明らかにすることに努めてきた。結果的に、第一に、民族名称や民族の「境界」が、近代国家の整備をめぐる政策の一環として「つくられた」ことと、それによって人びとが多重的民族構造を生きるようになったことを確認した。第二に、改革開放以後のグローバル化のなかで、そうした民族「境界」は、急速な経済成長のなかで必ずしも「排除」と「包摂」の対象を区分する機能を果たしたわけではなく、受動的に「境界」を生きざるを得なかった人びとによって利用される「資源」としての意味を持っていることを確認した。

それは、グローバリゼーション時代において直面せざる得なくなった多文化社会のあるべき方向性を提案するものであり、多重の人為的な「境界」が存在するなかで、人びとがそうした他者性を生きながらも、「境界」を戦略的に使い分けている構造を見出したことに大きな成果があった。そしてそれは、近代社会学の西欧型「社会」における「排除」と「包摂」の二元論を超える社会調査として、アジア的「社会」へのリアリティのある模索としても重要な研究意義があったといえる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

① 村島健司、「宗教による災害復興支援とその正当性――台湾仏教による異なる二つの災害復興支援から」、『関西学院大学先端社会研究所紀要』、査読無、第 14 巻、2017、55-69 ページ。

② 林梅、「在日中国朝鮮族のアイデンティティ――エスニシティの社会学的アプローチから」、『朝鮮族研究学会誌』、査読有、第 6 巻、2016、32-46 ページ。

③ 西村正男、「日本ロック創成期に中国系音楽家が果たした役割」、『野草』、査読有、第 97 巻、2016、53-66 ページ。

④ 佐藤哲彦、「薬害の社会学的記述に関する考察 ： 薬害ディスコースの分析」、『関西学院大学先端社会研究所紀要』、査読無、第 13 巻、2016、89-104 ページ。

⑤ 村島健司、「台湾の新仏教の伝道―慈済会の災害復興と文化的再開発をめぐって」、『天理台湾学会第 25 回記念研究大会発表予稿集』、査読無、2015、74-87 ページ。

⑥ 村島健司・林梅・荻野昌弘・西村正男、「国家のはざまで生きる――中国雲南省新平イ族タイ族自治県における文化的再開発」、『先端社会研究所紀要』、査読無、第 12 巻、2015、1-14 ページ。

⑦ 林梅、「「与えられた」選択としての国際結婚」、『東アジア研究』、査読有、第 62 巻、2014、99-111 ページ。

⑧ 佐藤哲彦、「「抑圧」から「管理」へ――薬物政策の向こうに透けて見える未来」、『シノドル』、査読無、第 149 巻、2014、29-46 ページ。

⑨ 林梅、「村の包摂と排除の仕組みから考える移動」、『朝鮮族研究学会誌』、査読有、第 4 号、2014、14-22 ページ。

〔学会発表〕（計 8 件）

① 林梅、「文化資源の利用をめぐる自己と他者――中国朝鮮族村の観光化を事例に」、日本社会学会大会第 89 回大会、2016 年 10 月 8.9 日、九州大学・伊都キャンパス（福岡県福岡市）。

② 林梅、「錯綜する民族境界――中国傣族の観光化を事例に」、日中社会学会第 28 回大会、2016 年 6 月 4.5 日、長崎大学・長崎ブリックホール 3 階（長崎県長崎市）。

③ 西村正男、「永遠の聶耳」2015 年度先端社会研究所全体研究会「文化的多様性を尊重する社会の構築に向けて、2016 年 2 月 10 日、関西学院大学先端社会研究所（兵庫県西宮市）。

④ 佐藤哲彦、「薬害の一般性とその概念化における課題をめぐって」関西社会学会第 66 回大会、2015 年 5 月 23 日、立命館大学（京都府京都市）。

⑤ 荻野昌弘、「社会学者はどこまで時空認識を広げることができるか」、第 50 回環境社会学大会、2014 年 11 月 22 日、龍谷大学（京都府京都市）。

⑥ 西村正男、「日本华侨音乐家与战争：以梁乐音与瀬川伸为例 （日本華僑音楽家と戦争―梁楽音、瀬川伸(施延雄)を中心に)」、国際ワークショップ「日中戦争期における日中芸術のコラボレーション展開」、2014 年 9 月 6 日、名古屋大学、主催：名古屋大学国際言語文化研究科、四川省社会科学院文学所（愛知県名古屋市）。

⑦ Masahiro OGINO, "Postmodern View of Time in Sociology" ,XVIII ISA World Congress of Sociology ,July 14 2014, パシフィユ横浜（神奈川県横浜市）.

⑧ 村島健司・林梅、「グローバル化の中における文化変容――雲南省新平イ族タイ族自治県を事例」、日中社会学会第 26 回大会、2014 年 6 月 6・7 日、大同大学・滝春キャンパス（愛知県名古屋市）。

〔図書〕（計 7 件）

① 荻野昌弘・李永祥・村島健司・林梅・西村正男、明石書店、『国家のはざまを生きる――中国雲南省少数民族から見る世界』、2017、総 240 ページ。

② 好井裕明・関礼子・村島健司など、明石書店、『戦争社会学：理論・大衆・表象文化』、2016、総 246 ページ、171-194 ページ。

③ 李永祥・劉世哲・村島健司など、雲南人民出版社、『安危之思 ―災害人類学及防災減災国際学術検討会論文集』、2016、総 376 ページ、165-174 ページ。

④ 大橋毅彦、藤田拓之、井口淳子、榎本泰子、星野幸代、趙怡、趙維平、瀬戸宏、邵迎建、春名徹、関根真保、藤野真子、西村正男、秦剛、勉誠出版、『上海租界の劇場文化―混淆・雑居する多言語空間』(アジア遊学 183)、2015、総 228 ページ、194-203 ページ。

⑤ 貴志俊彦、川島真、孫安石、佐藤卓己、竹山昭子、李承機、金栄熙、上田崇仁、西村正男、大城由希江、林果顕、江柏煒、林美華、小林聡明、梅村卓、白戸健一郎、林果顕、土屋由香、須藤瑞代、香取俊介他、勉誠出版、『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』、2015、総 632 ページ、250―268 ページ。

⑥　林梅、御茶ノ水書房、『中国朝鮮族村落の社会学的研究――自治と権力の相克』、2014、総 214 ページ。

⑦　荻野昌弘・蘭信三編、生活書院、『3.11 以前の社会学――阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』、2014、総 264 ページ。

〔産業財産権〕

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

林 梅（LIN, Mei）
関西学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：20626486

(2)研究分担者

荻野 昌弘（OGINO, Masahiro）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号： 90224138

佐藤 哲彦（SATOO, Akihiko）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：20295116

西村 正男（NISHIMURA, Masao）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：80302652

村島 健司（MURASHIMA, Kengi）
関西学院大学・先端社会研究所・専任研究員
研究者番号：60707511